

無償資金協力医療機材等維持管理情報センター

JICSは、フォローアップの一環として、これまでに無償資金協力によって供与された医療機材に関して、現地医療機関の関係者からの問い合わせに応じる形で機材の操作方法やメンテナンスに関する技術情報、スペアパーツの購入に関する情報などを提供する「無償資金協力医療機材等維持管理情報センター」を設置しています。

このセンターは、1999年2月に外務省、独立行政法人国際

協力機構(JICA)の賛同を得て開設されたもので、海外医療機器技術協会(OMETA)をはじめ関係団体の協力を得ながら活動しています。無償資金協力によって供与された各国の医療機材が可能な限り長く有効に活用されるよう、JICSは関係団体との連携のもと、センターの運用を続けていきます。

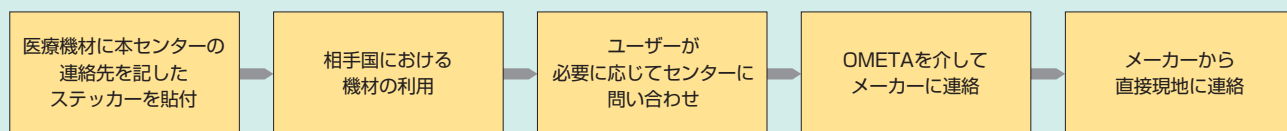


納入会社の協力を得て、無償資金協力で納品される医療機材には、このセンターの連絡先を記したステッカーを貼付する

対象となる医療機材の条件

- 無償資金協力で供与されたものであること
- 20万円以上の機材であること
- 耐用年数期間中であること
- 日本製の機材であること

活動の流れ



国際協力への理解促進のための取組み

JICSでは、より多くの方にODAやJICSの業務に対するご理解を深めていただくため、総合学習やインターンなどの受け

入れを行っています。ご関心をお持ちの方は、お気軽にお問い合わせください。



碧南市立東中学校から3人の生徒さんが来訪し、JICS職員からODAの仕組み、食糧援助、鳥インフルエンザ対策支援について説明しました。



財団法人 日本国際協力システム

〒162-0067 東京都新宿区富久町10番-5号 新宿EASTビル 2、3階
TEL: 03-5369-6960 FAX: 03-5369-6961 E-mail: jics@jics.or.jp
URL: http://www.jics.or.jp/

JICS [ジックス・インフォ・パック] INFO-PACK

援助をカタチに

September 2010

財団法人日本国際協力システム

社会活動

JICSは、1989年の設立以来、日本の政府開発援助(ODA)やさまざまな開発途上国支援において、現地で必要とされている物品やサービスを適正かつ効果的に調達しています。それに加え、業務を通じて蓄積した知識や情報、経験などを、開発途上国や援助現場で活動する人々に提供することで、より一層質の高い国際協力を推進し、社会の一員としての役割を果たすため、以下のような社会活動を行っています。

JICS NGO支援事業



プロジェクト支援事業

無償資金協力医療機材等維持管理情報センター



津波防災啓発パンフレット「稲むらの火」の配布

国際協力への理解促進のための取組み



JICS NGO支援事業

JICSは1999年度より、国際協力分野で活動する日本のNGOを支援する「JICS NGO支援事業」を実施しています。これは、比較的小規模な団体に対して活動に必要な資機材の購入費や輸送費、団体運営費、団体基盤強化のための費用を、1件あたり100万円を上限に支援するものです。この資金は基本財産の運用による利子収入や、事業の収支差が原資となっています。

当初、この事業は開発プロジェクトを実施するNGOを対象としていましたが、2003年度からはさまざまなNGOをとりまとめた

JICS NGO支援の対象となる活動

- 貧困対策、医療・保健衛生、教育・啓発、農業・林業・畜産業・水産業などのプロジェクト活動
- 開発途上国問題、難民問題、平和構築問題に関するアドボカシー活動
- ネットワーク型NGOの活動
- 組織運営（経営・経理・人材育成・広報など）の安定、強化に必要な活動

情報提供・人材育成などを実施している「ネットワーク型NGO」への支援を開始、さらに2004年度からNGOの「団体基盤強化費」も支援対象とし、より広範囲な支援となるよう改善してきました。

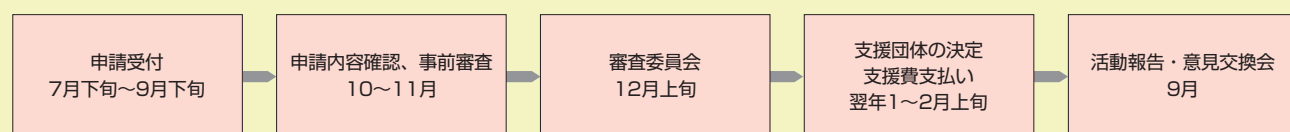
JICSは毎年度10団体程度に対してこの事業による支援を行っており、これまでに支援した団体は延べ110団体、支援総額は9千万円*にのぼります。

(※2010年6月現在)



毎年度行われている、活動報告会・意見交換会。支援した団体から直接報告を受けると同時に、団体と審査委員・JICS職員との相互理解を深めるための意見交換を行っています。

スケジュール概要



これまでに支援したNGO (50音順)

団体名	団体名	団体名
アフリカ村おこし運動	(特活)日本チェルノブイリ連帯基金	(特活)エース
国際協力NGO・IV-JAPAN	日本ラテンアメリカ協力ネットワーク	(特活)えひめグローバルネットワーク
(特活)サヘルの森	スランガニ基金	(特活)国際子ども権利センター
(特活)シギリヤ レディ ネットワーク	(特活)セカンドハンド	ディファル
(特活)シャプラニール=市民による海外協力の会	(特活)丹波グリーンフォース	(特活)名古屋NGOセンター
チボリ国際里親の会	途上国の精神保健を支えるネットワーク	道普請人
(特活)日本国際ボランティアセンター	インターバンド	(特活)アクセス 共生社会をめざす地球市民の会
(社)日本国際民間協会	スリランカ学童援助会	(特活)アブカス
(財)日本農業研修場協力団	(特活)ノマドインターナショナル	(特活)インド福祉村協会
(特活)パレスチナ子どものキャンペーン	(特活)ヒマラヤ保全協会	NVDAアジア・ボランティア発展ネットワーク
(特活)ヒマラヤグリーンクラブ	会津サクラランカ会	(特活)NGO福岡ネットワーク
緑のサヘル	青年海外協力隊バナMOV会	(特活)国際子ども権利センター
(特活)ラブ・グリーン・ジャパン	北海道NGOネットワーク協議会	ジュマ・ネット
2050	(特活)アジア日本相互交流センター	地雷廃絶日本キャンペーン
ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会	(特活)アフリカ地域開発市民の会	(特活)地球市民の会
(特活)NGO 地に平和	緑のサヘル	(特活)テラ・ルネッサンス
(特活)アジアマインド	横浜NGO連絡会	(特活)アマニ・ヤ・アフリカ
(特活)幼い難民を考える会	地球市民交流基金EARTHIAN	(特活)AMURT Japan
サヘルの森	(特活)日本カンボジア交流協会	(特活)ACE
(特活)シェア=国際保健協力市民の会	(特活)開発と未来工房	(特活)沖縄NGOセンター
(特活)地球の友と歩む会	(特活)名古屋NGOセンター	(特活)関西NGO協議会
チベット難民児童奨学会	(特活)環境修復保全機構	(特活)国際インフラ調査会
(特活)徳島で国際協力を考える会	(特活)国際協力NGOセンター (JANIC)	スタディツアー研究会
(財)ピー・エイチ・ディー協会	(特活)アフリカ日本協議会	(特活)ソルト・バヤタス
ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト	(特活)カラ=西アフリカ農村自立協会	(特活)チェルノブイリ救援・中部
21世紀協会	(特活)地球市民ACTかながわ/TPAC	(特活)日本カンボジア交流協会
(特活)アフリカ児童教育基金の会	(特活)TICO ミャンマーの医療を支援する会	(特活)フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
アフリカ平和再建委員会	(特活)ラオスのこども	
(特活)幼い難民を考える会	(特活)アフリカ地域開発市民の会	

(2010年6月現在)

プロジェクト支援事業

JICSは、設立20周年を機に、JICSの目的である「一層質の高い国際協力の推進」を実現するための活動の一つとして、新たな社会活動「プロジェクト支援事業」を開始しました。

これは、JICSが調達代理業務を行ったプロジェクトによって建設された施設や、資機材が納入された組織などを対象に、それらの施設・組織の今後の活動の促進の一助となるよう、記念品などを贈るものです。

記念品などは、その施設・組織の関係者の要望をもとに、現地JICSスタッフが具体的に決めていきます。記念品の購入、輸送にはJICSの自主財源を充てることとしていますが、民間企業等による寄付活動などの社会貢献活動との協調や、開発途上国に対する援助活動を行っているNGOとの連携なども模索しながら、より効果的な支援を目指します。



地理学習のために地図を贈りました (セネガル)



贈られたボールを持つ子どもたち(レソト)



寄贈する地図を手渡すJICS職員(左端)(セネガル)

津波防災啓発パンフレット「稲むらの火」の配布

2004年12月26日に発生したスマトラ沖大地震・インド洋津波によって甚大な被害が発生したことを契機に、津波に対する防災意識を高める目的で、マレーシア医療救済協会 (MERCY Malaysia)、アジア災害還元応答ネットワーク (ADRRN)、アジア災害還元センター (ADRC) は、「稲むらの火」パンフレットを、被災国の言語を中心に複数国の言語で制作しました。「稲むらの火」は、1854年に日本の和歌山県沿岸の村で大津波が起きた際の実話をもとにした物語です。津波に対する知識や心得を広め、防災意識を高めるために現在も各地で語り継がれています。

JICSは、スマトラ沖大地震・インド洋津波被害への支援に



インドネシアでは3つの小学校と7つの中学校にこのパンフレットを配布しました。

携わった経験から、このパンフレットを活用した津波防災啓発を社会活動の一つと位置づけ、2010年4月より、防災・災害復興支援無償で関わった相手国政府関係者などに配布しています。

「稲むらの火」

地震の揺れの後、海の様子から異変を感じた村長の五兵衛は、村人に津波の危険を知らせるため、自分の収穫した稲の束（稲むら）に自ら火をつけて村人たちの注意を引き、村人全員を高台へと避難させ、多くの命を救うことができた。



「稲むらの火」パンフレットは、ホームページからご覧いただけます。
http://www.jics.or.jp/pdf/tsunami_pamphlet_2010.pdf